



こだわりの内装にも注目です。

内装で問題となるのは、建物全体をどのようなイメージで仕上げるかということです。検討の結果、備中櫓は数奇屋風の書院建築、それも若干女性的なイメージが強かったと想定されました。

特に一階「御座之間」及び「御次」の壁は「紗綾形」文様の唐紙とし、二階は全面を「鶴丸」文様の唐紙とした上でさらに「御上段」は唐紙の色を淡いブルー系統の色としました。

柱などの構造材は櫓という建物の性格上、頑丈さを優先して太いものを使用していますが、「御座之間」には床や違棚を設けるなど、書院建築風の仕上げとなっています（上写真）。この部屋の壁は先ほど述べたとおり「紗綾形」文様の唐紙ですが、一見したところクリーム色の無地に見えます。これが光の反射の具合で所々にかすかに「紗綾形」が浮かび上がるのです。これは二階の鶴丸文



御座之間の奥には「御茶席」を備える。櫓の中ゆえその配置は茶室の定石通りとはいかないが、室内の中央やや北西寄りには本格的な炉がしつらえてある。主人のくつろぎのスペースだろうか。

様も同様です。

ただし、二階の「御上段」だけは若干異なります。淡いブルーの中に雲母摺りの鶴丸が常に浮かび上がっています。

このブルーの唐紙は「御上段」に座った人物を美しく浮かび上がらせる舞台装置とも言えるでしょう。

このように備中櫓は内外装に様々な特徴を備えています。市民の皆さんにはこの備中櫓を実際に間近で見ていただき、少しでも築城当時の津山城の建造物をイメージしていただければと思います。

この建物が新たな津山城のシンボルとなれば幸いです。

津山城だより No.8	
TSUYAMAJODAYORI	
発行年月日	平成17年3月19日
編集・発行	津山市教育委員会 津山城整備推進係 〒708-0824岡山県津山市沼600-1 TEL (0868)24-8413
印刷	(有)二葉

※この資料は史跡等総合整備活用推進事業の一環として作成しました。

津山城だより

TSUYAMAJODAYORI

No.8
2005年3月

津山市教育委員会
津山城整備推進係



備中櫓が完成しました。

平成13年度から足かけ4か年をかけて実施した「史跡津山城跡備中櫓復元整備工事」が今月をもって完了しました。平成14年1月16日の起工式以降数多くの工程を経て、備中櫓が往時の姿を現しました。

今回の津山城だよりでは、備中櫓完成に至る道のりを振り返るとともに、備中櫓の見どころを紹介します。

是非皆さんも「実物」の城郭建築であり、御殿建築でもある備中櫓を実際に見学して、その大きさや仕上げを体験してください。

（写真上は二の丸から見上げた備中櫓。写真右は二階北西隅に設けられている「御上段」。）



3年余りの歳月を経て

備中櫓が蘇りました。

1. 工事着手まで

平成10年3月、「史跡津山城跡保存整備計画」を策定し、市民生活と津山城との新たな共生関係を構築するために、発掘調査・文献調査などの研究成果を踏まえて城跡の整備を行うこととなりました。

整備の事業期間は平成10年度から平成29年度までの20年計画としています。その期間の中で、A虎口通路整備、B石垣修理、C既存樹木整理、D既設専有物の撤去、E建造物の復元、F展示説明計画などの整備を行い、都市公園としての津山城の役割を配慮しつつ、できる限り城跡を往時の景観に戻していくことを目標としています。

ところで、先ほどの20年間の事業期間中の2004年は、森忠政が津山城の築城を開始してから400年目あたりです。そのため、この築城400年に合わせて城内の櫓の中でも最大級の規模を持つ備中櫓を復元整備の対象とすることになったのです。

そして平成10年度以降、具体的な作業として、資料の悉皆調査、発掘調査など基礎資料の蓄積を行いました。そして作業開始から4年目の平成13年に国から復元の許可が下り、復元整備工事が開始されたのです。

江戸時代から残る石垣と、新たに据え付けられた礎石で櫓全体の重量を支える。基礎の石と土台木は右のような「光付け」の技法によって密着している。建物は基礎の石に「載っている」だけである。



復元にあたっては現存史料の悉皆調査を実施した。その成果は「津山城 資料編」全3巻にまとめられている。右上は備中櫓絵図、右は調査から得られたデータによる復元予想図。



工事期間中最大のイベントである「上棟式」は平成15年2月26日に行われた(上写真)。また工事期間中、随時一般見学会を実施し、工事中でなければ見ることのできない内部の構造も公開した。



2. 基礎工事～上棟式

実際の工事の工程の中で最も時間を費やしたのは、基礎工事でした。

備中櫓を復元する場所は、江戸時代の備中櫓が建っていたまさにその場所ですので、地下には江戸時代の遺構が埋まっています。それらを毀損することなく、さらに江戸時代の石垣の上に直接建造物を復元するという、非常に困難な設計になっています。そのため、備中櫓の外周の基礎は江戸時代の石垣の天端面に直接据付け、内部は土盛りを行い、遺構面を保護した上で新たな礎石を据付けています。

このような基礎を採用したため、結果的には土台木の高さが外周と内部で異なるという複雑な構造となりました。そのため、土台と柱の接合は「知恵の輪」を解くような複雑な手順で行われたのです。

3. 瓦葺～壁塗

屋根に葺く瓦は備中櫓で出土したものを忠実に再現しており、備中櫓で出土していない鯨などは、同時代に造られた他の城の櫓のものを参考に製作しました。

この屋根瓦を葺くにあたっては、通常は屋根の上に土を置き、その上に瓦を葺くのですが、備中櫓全体の重さを軽量化するために、土を置かずに仕上げています。

なお、備中櫓の一階の平面は石垣の形態に合わせて作られているため、直角な部分が一つもなく、瓦を葺く技術も高度なものが要求されます。

一方、壁土は現場で約一年間寝かせたものが使用されています。そして荒壁を仕上げた段階でそのまま一冬越し、その後、中塗りから仕上げの漆喰塗りへと作業を進めました。

この壁土は、乾燥が足りなかったり、作業が不十分な場合は壁にヒビが入りやすくなるため、特に時間をかけて慎重に作業が進められました。

この壁は10に近い作業工程を経て最終的には外壁で厚さが約一尺(約30cm)にも達し、櫓の外観はいかにも城郭建築としての櫓の雰囲気を出しています。



工事期間中、備中櫓を覆っていた素屋根。その内部には工用のクレーンや足場が組まれており、現場を風雨から守るだけでなく、施工に不可欠の構造物であった。その素屋根は平成16年11月11日午前11時11分、南側のシートが取り外され、人々の前に備中櫓がその姿を現した。

3. 内装

備中櫓の見どころはその外観だけではありません。本丸御殿の一部として機能していた櫓の内部は、やはり御殿建築の仕上げとなっています。

奥向御殿の更に奥という場所に位置しているため、藩主あるいはその家族のための空間であったと考えられます。

そのため通常の櫓では希な全室畳敷、天井張りという構造で、絵図によると「御座之間」、「御茶席」、「御上段」等の全国的にも余り見られない空間が存在していました。



南西上空から見た津山城本丸と備中櫓。備中櫓が本丸から大きく南に張り出していることがわかる。備中櫓左奥は天守台。